

公益財団法人 檜の芽会 御中

令和6年度伴走型就学・学習支援活動助成 実施報告書

【団体の概要】	① 作成日	令和7年5月30日	
②法人・団体名	特定非営利活動法人松山さかのうえ日本語学校		
③団体所在地 (都道府県・市町村名まで)	〒790-0001 愛媛県松山市一番町2丁目5-10		
④責任者氏名	山瀬 麻里絵	(役職名等)	代表理事
⑤担当者氏名	山瀬 麻里絵	(役職名等)	代表理事

【奨学活動の概要】	⑥助成交付決定番号	R06-044	⑦助成金額	90万円	⑧申請カテゴリー	DS
⑨奨学活動名	ことばの壁を越えた伴走型学習支援—今と未来の自分の優先順位を一緒に上げるプログラム—					
⑩主な実施場所名・及びその住所	〒790-0001 愛媛県松山市一番町2丁目5-10					

⑪活動内容とその成果の概要 (詳細は【様式3-2】又は別添資料にて記載・説明ください。)

高校生世代のための新しい居場所「国際コワーキングラウンジ」を開設し、多文化共生・多言語に対応した環境の中で、学習支援やキャリア教育を実施しました。小規模で少人数制のアットホームな空間を活かし、一人ひとりに寄り添った支援を行った結果、参加した高校生たちが学習や進路に対して前向きな姿勢を持つようになりました。

また、高校生自身がラウンジのリフォーム案に関わったことで、場所への愛着と主体性が育まれ、自然な形で参加者が広がるきっかけとなりました。さらに、留学生スタッフとの交流を通じて、実践的な英語の活用や異文化理解が促進され、国際的な視野が広がり、将来の選択肢を広げる効果も見られました。

⑫奨学活動の定量的把握 (注：統計情報として参考まで把握するものです。活動成果等は上段⑩及び様式3-2等でご報告願います。)

支援対象	延べ人数 (A：人)	平均時間 (B：時間)	活動量 (A x B)	備考・補足・計算根拠等
中学生等	0	0	0	
高校生等	212	3	636	ラウンジの開校時間1日3時間
大学生等	0	0	0	
学習支援員等	138	3	414	延べ55回の実施。2~3人/回の学習支援員。
その他	0	0	0	
合 計			1050	

⑬その他の定量的な数値 (任意)

令和6年度伴走型就学・学習支援活動助成 実施詳細報告書

奨学活動名：ことばの壁を越えた伴走型学習支援

一今と未来の自分の優先順位を一緒に上げるプログラム

法人・団体名：特定非営利活動法人松山さかのうえ日本語学校
作成者 氏名：山瀬 麻里絵

1. 取り組んだ課題や実践した目的・実施内容について

高校生世代に向けた新たな学習支援の場として、「国際コワーキングラウンジ」を開設しました。本事業では、国際子ども食堂の運営ボランティアとして関わっている多国籍な高校生を中心に、学習支援やキャリア教育を行うものです。

事業をはじめた目的

本事業は、「働いたこともないのに、将来のことなんて決められない」という高校生の切実な声を出発点に、進路に悩む多国籍なルーツをもつ高校生世代に対して、等身大で向き合える新たな居場所、学習支援の場をつくることを目的に始めました。

行政の支援制度は中学生以下を対象とするものが多く、「高校生向けの支援」を求めても明確な担当部署がない現状があり、地域からも「高校生に支援が必要なのか？」という声が少なからず聞かれました。しかし実際には、アルバイトが禁止されていたり、十分な社会経験がない中で将来の進路を決断しなければならない高校生たちが、多くの矛盾や不安を抱えています。

そうした声に応えるべく、「国際コワーキングラウンジ」を開設し、希望する高校生にはキャリアコンサルタントとの個別相談や、興味のある職種でのインターン体験など、社会との接点を持てる機会を提供してきました。

同時に、学校と家庭の間にある“第三の居場所”として、放課後にほっと一息つける部室のような場所を提供したいという思いも、この事業の原点です。学びや交流、国際的な出会いを通じて、視野を広げ、自分らしい未来を描くきっかけとなる空間を、高校生たちと共につくっていきたいと考えています。

事業の実施内容

①多文化共生・多言語対応の環境整備

ラウンジには毎回、日本国籍・外国籍の学習支援員が常駐し、最低3か国語以上での対応が可能な体制を整えました。まずは、「ことばの壁」を取り払うことで、誰もが安心して過ごせる環境を整えました。その後、個々のニーズに応じて、学習支援員による大学受験対策や世界に関する講義、それからキャリアコンサルタントによる個別面談を実施しました。

②小規模・少人数制だからこそその個別支援

運営拠点となった教室は小規模ながらもアットホームな雰囲気があり、少人数制で一人ひとりに寄り添った支援を実現しました。これにより、高校生たちは進路や学習へのモチベーションを高め、自信を持って次のステップへ進む姿勢が育まれました。

③ラウンジの「共創」が信頼と定着を生む

事業開始当初、「国際ワーキングラウンジ」という名称が支援色を薄める一方で、認知の難しさから集客面に課題がありました。しかし、既に関わっていた高校生たちに協力を仰ぎ、ラウンジのリフォーム案を共に考えるワークショップを実施。これにより、彼らにとってラウンジが「自分たちでつくり上げた居場所」となり、自然と友人を誘い合う場へと成長していきました。

④多文化交流による実践的学びと意識の変化

参加した高校生からは、

- 「学校で学んでいた英語を、実際に使える場ができた」
- 「世界をより身近に感じられるようになった」

といった声が寄せられ、実践的な語学力の向上や、国際的な視野の広がりが確認されました。これにより、英語でのコミュニケーション力や異文化理解への意欲が高まり、参加した学生達の将来の選択肢を拡大する大きな一歩となったと確信しています。

2. 実施した奨学活動の詳細

- ・活動内容の詳細（写真や図表を用いてご説明ください。）

学習支援員として留学生スタッフが参加者に実際に行った講義内容をご紹介します。講義内容は毎回違うため、一部をピックアップしてご報告いたします。

1. 講義の概要

今回ご報告させていただく講義は、多文化理解をテーマとし、留学生との交流を通じて異文化体験を提供することを目的として実施しました。アフリカおよびインドネシアに関する体験型プログラムを中心に、参加者の興味・関心を引き出す内容となりました。

2. 実施内容

①「アフリカってどんなところ？」True or False ゲーム

アフリカに関するクイズ形式のゲームを通して、参加者が楽しみながら知識を深めました。「マラウィってどんな国？」「チョコレートが有名な国は？」などの問いに対し、答えを聞いた参加者からは「なぜそうなるのか？」といった新たな疑問が生まれ、留学生との対話を通してさらに理解を深める場となりました。



② インドネシアの伝統服「バシュ・クルアン・ブンド・カンドゥ」の試着とヒジャブ体験

参加者はインドネシアの伝統衣装やヒジャブを実際に身につける体験を行いました。ヒジャブを着用した参加者からは、

- 「今までは『暑そうだな』と思っていたけれど、実際につけてみると意外とそうでもなかった」
- 「何とも言えない安心感につつまれた」

などの感想が寄せられ、体験を通じた新たな発見が得られた様子でした。また、衣装を着用しての記念撮影も各自が楽し



み、文化理解の一助となりました。

③ インドネシアのインスタントラーメン「Indomie」の試食
インドネシアで広く親しまれているインスタントラーメン「Indomie」を参加者が試食しました。「スパイスの量を自分好みに調整できて、とても美味しかった」といった感想が多く寄せられ、食文化に対する関心が高まりました。また、Indomie がインドネシアの若者たちにとって思い出の味であるというエピソードも留学生から紹介され、参加者は興味深く耳を傾けていました。



3. その他の取り組み

講義時間外には、進路相談の時間や夢を語り合う時間、自習室としての開放も行い、参加者にとって自由で安心できる居場所づくりを意識した運営を行いました。

・参加人数

毎回2名～6名程度（延べ212名）

・周知方法や協力いただいた関係者

本事業の実施にあたり、40,000枚のチラシを配布し、広範な情報提供と参加促進に繋げることができました。

また、地域の行政機関および学校機関を中心とした10団体との連携により、支援を必要とする高校生へ効果的なアウトリーチが可能となりました。これらの機関との協働を通じて、対象層への直接的な情報提供や案内が実現しました。

さらに、ホームページやSNS（Instagram、X（旧Twitter）等）を活用した広報活動も積極的に展開し、オンライン・オフライン両面からのアプローチを組み合わせることで、地域を越えた広域的な周知活動を行うことができました。

・地域やボランティア活動との連携

①松山工業高等学校

松山工業高等学校と連携し、ラウンジ参加者である高校生を中心に、未就学児・小学生を対象とした「カラフルスライム作りワークショップ」を国際子ども食堂内にて実施しました。

高校生が企画・運営に主体的に関わることで、異年齢間の交流が生まれ、子どもたちにとって楽しく学べる機会となっただけでなく、高校生自身にとっても地域の中での役割や責任を実感する貴重な経験となりました。

また、この取り組みにより、松山工業高校との連携が深まり、今後は情報交換や学生への呼びかけ、地域イベントへの協力依頼など、相互に支え合う関係構築が期待できる体制が整いつつあります。

また松山工業高校は、進路選択の幅が広いいため、卒業後就職を考えていた生徒が、本ラウンジの利用者となり、地元の国立大学への進路変更を行い、見事合格となったケースもありました。

②国際子ども食堂

当団体が運営する「国際子ども食堂」と連携し、国際子ども食堂の食材のストックや余剰食材を活用し、ラウンジ来訪後に参加者へ食料を持ち帰ってもらう形で、延べ101名の高校生に対して食料提供も行い

ました。

また、学習会においては、ハラル料理など外国人の食文化に対応した食事の提供を行い、食料支援と同時に多様な文化への理解を深める機会を設けることができました。これらの取り組みは、食を通じた交流・学びの促進にもつながりました。

③松山市教育委員会

広報活動においては、松山市教育委員会との連携のもと、チラシに「後援」としてご協力いただいたほか、松山市内の全公民館へのチラシ配布を通じて、地域全体への周知を図ることができました。教育委員会との連携により、信頼性のある情報発信が可能となっただけでなく、公的機関のネットワークを活用することで、より多くの高校生やその保護者、地域関係者への情報到達が実現しました。

④近隣の飲食店、個人商店（6社）

周知活動の一環として、近隣の飲食店や個人商店（計6店舗）にご協力いただき、チラシの配架・掲示を依頼しました。

具体的には、商店街のパン屋やビジネス街に位置する飲食店など、地域住民や若者の利用が多い場所に設置することで、日常的な接点を通じた自然な広報が可能となりました。

地域の店舗にご協力いただくことで、地元とのつながりを深めると同時に、若者や保護者世代へのリーチを広げることができました。

・学習支援員について

学習支援員は、当初の想定を上回る人数を確保することができ、安定した運営体制を構築することができました。

日本人と外国人の学習支援員の割合については、事業の進行に伴い、結果として外国人支援員の割合が高くなる傾向となりました。これは、参加者の外国文化に対する関心や、異文化交流の機会を求める声に応じて、意図的に多文化的な人材を活用した結果でもあります。

このような体制は、学習支援の場を通じて参加者の興味・関心を広げるとともに、学びの満足度向上にも寄与したものと考えられます。参加者にとっては、単なる学習支援にとどまらず、多様な価値観や文化に触れる貴重な機会となりました。

今後も、学習支援の質と多様性を両立させた体制づくりを目指し、学習支援員の確保・育成に努めてまいります。

・購入した機材・物品の写真（助成表示用シールの貼付）

学習用机



・本棚



3. 本活動から得られたもの、反省点、課題、今後への発展性、等

定期的な参加を促す仕組みの構築

参加が単発にとどまるケースも多く、継続的な学びや成長を促すには、参加者の関心を引き続ける仕掛けや、プログラム内容のさらなる魅力づけが求められると感じました。

「みんなで創る」仕組みの強化

今回、国際子ども食堂内で開催したイベントでは、高校生が主体となって子ども向けワークショップを企画・実施することで、多くの学生が自らの活躍の場を実感し、「喜ばれる喜び」を得て大きく成長する姿が見られました。

今後も、高校生が主体的に関わる機会継続的に設け、「やってみたらできた！」という成功体験を積み重ねられる環境づくりに努めてまいります。

地域との連携強化

学校、保護者、地域団体との連携体制を更に強化し、情報共有や紹介の仕組みを整えることで、より幅広い高校生の参加を促し、定着を目指します。

実践的なキャリア支援の充実

今回は参加者のほとんどの参加者が「進学」を希望していたため、外部企業との連携は行いませんでした。しかし、今後の事業継続にあたっては、企業や大学との連携を図り、インターンシップやキャリア講座など、より実践的でリアルな社会体験の場を提供することで、参加者の進路選択に役立つ学びをさらに充実させていきたいと思っています。

「食」を通じた居場所づくりと自立支援の強化

これまでの食糧支援を通して、「一緒に作って一緒に食べる」ことが、単なる支援にとどまらず、信頼関係や居場所感を生み出す力を持つことを実感してきました。今後も、一緒に作り、一緒に食べる体験をすることで、食の楽しさを実感するとともに、調理を通じて自立への力を育むきっかけにもなればと思っています。

4. 本活動におけるエピソード、思い、感想、等（任意）

今回の事業では、「高校生」だけでなく「高校生世代」と対象を広げたことで、高校卒業後に居場所を失った若者たちも、自ら何かを求めてラウンジに足を運んでくれるようになりました。これは、将来について手探りで模索し続けられる“居場所”としての価値が高まった証だと感じています。

また、将来やってみみたいこととして「留学」や「海外旅行」を挙げていた学生たちが、ラウンジで外国人と直接交流し、現地の文化や暮らしについて生の声を聞けたときの、目を輝かせた表情がとても印象的でした。旅行ガイドには載っていないリアルな話が聞けた経験は、彼らにとって大きな刺激だったと思います。

さらに、学校に自分の居場所を見出せなかったある高校生からは、「教室が自分の世界のすべてだと思っていたけれど、ここで世界の話を聞いて、自分の視野が広がり、教室の世界がとても小さく見えるようになった」との感想もいただきました。これはまさに、高校生の視野や可能性を広げるという本事業

の大きな成果だと実感しています。

学習支援員の留学生スタッフとの関わりは、単に英語や海外文化を学ぶにとどまらず、参加者にとって将来の選択肢や生き方の幅を広げるきっかけとなったと思います。

また、「高校生世代の支援」を担当する部署が明確でなかった松山市との間でも、事業を通してその必要性について話し合う機会が生まれ、今後行政と連携・協働していく上での大切なネットワークの土台を築くことができたことは、今後の活動継続のための大きな成果だったと思っています。

この事業をはじめるとあって、まずはこれまで当団体の事業で運営メンバーとして活躍していた学生たちを中心とした支援を考えていました。当団体で運営する国際子ども食堂に運営メンバーとして携わりながらも、自身も経済的な困窮を抱えていたり、将来に悲観的な考えを持っている学生も多かったためです。しかし、彼らにラウンジを「自分たちの居場所」として定着をさせることは思った以上に難しいことでした。彼らの特性として、人のために何かをする労力は惜しまない一方で、自分のために時間をとったり誰かの助けを借りることを苦手とする傾向がありました。

そのため、本当に必要な支援を見極めるためにメンバー限定の利用時間を設けてみたり、何度も試行錯誤を繰り返しました。しかし、結局彼らの「居場所」となった場面は、ラウンジの「居場所」提供とは関係のない、意図せず集まってもらった「大きなイベントに向けての作戦会議」だったりしました。意図せず行ったことが、結果的に居場所となっている場面も多く、こちらも多くを学ばせてもらった気がします。

事業後半には、経済的な理由で大学入学を断念せざるを得ない学生からの相談を受けたり、鍵をなくして家に入れないうきに駆け込んでくる学生が現れるなど、数値にこそ表れないものの、この事業が彼らにとって重要な支えとなっていると感じることができたのも、とても嬉しいことでした。

今後も引き続き必要とする方々へ支援を続けていきたいと思っています。本当にありがとうございました。